日本推理小説大系第1巻

明治大正集
定価三八〇円

著者　黒岩涙香　幸田露伴　泉鏡花
岡本綺堂　谷崎潤一郎　芥川
龍之介　正宗白鳥　佐藤春夫
中島河太郎

発行者　黒川義道
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社
発行所　東都書房
東京都文京区音羽町三丁目一九
電話　東京(九四一)三一一一
振替　東京　七二七三二
落丁乱丁本はおとりかえします

昭和三五年一二月二〇日第一刷

目次

黒岩涙香
無惨 5
幸田露伴
あやしやな 25
泉鏡花
活人形 37
岡本綺堂
利根の渡 65
谷崎潤一郎
途上 75　私 86　友田と松永の話 94　日本におけるクリップン事件 129
芥川龍之介
藪の中 139　報恩記 145
正宗白鳥
人を殺したが 157
佐藤春夫
女誡扇綺譚 225　オカアサン 247　女人焚死 254
日本推理小説史　中島河太郎 274
解説　江戸川乱歩 296

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

黒岩涙香

無慘

無慘序

日本探偵小說の嚆矢とは此無慘を云ふなり無慘とは面白し如何なること柄を書しものを無慘と云ふか是れは此れ當時都新聞の主筆者涙香小史君が得意の怪筆を染め去年築地河岸海軍原に於て人殺のありしことを作り設け之れに探偵の事項を附會して著作せし小說なり予本書を讀むに始めに探偵談を設けて夫より犯罪の事柄に移りお紺と云ふ一婦人を搜索して証據人に宛て之れが口供より遂ひに犯罪者を知るを得るに至る始末老練の探偵が自慢天狗若年の探偵が理學的論理的を以て一々警部に對つて答辯するごとき皆な意表に出て人の膽を冷し人の心を寒らしむる等實に奇々怪々として讀者の心裡を娛ましむ此書や涙香君事情ありて予に賜ふ予印刷して以て發布せしむ世評尤も涙香君の奇筆を喜び之を慕ひて其著書譯述に係る小說とを求めんと欲し續々投書山を爲す之をもつて之を見れば君が文事に於ける亦た羨むべし嗚呼涙香君は如何なる才を持て筆を採るや如何なる技を持つて小說を作るや余は敢て知らず知らざる故に之れを慕ふ慕ふと雖も亦た及ばず是れ卽ち天賦の文才にして到底追慕するも亦畫餅に屬すればなりと予は筆を投じて嗟嘆して止みぬ

明治廿二年十月中旬

香夢樓に坐して梅廼家かほる識す

上篇（疑團）

世に無慘なる話しは數々あれど本年七月五日の朝築地字海軍原の傍らなる川中に投込ありし死骸ほど無慘なる有樣は稀なり書さへも身の毛逆立つ翌六日府下の各新聞紙皆左の如く記したり

◎無慘の死骸　昨朝六時頃築地三丁目の川中にて發見したる年の頃三十四五歲と見受けらるゝ男の死骸は何者の所爲にや總身に數多の創傷、數多の擦剝、數多の打傷あり背などは亂暴に毆打せし者と見え一面に膨揚り其間に切傷ありて傷口開き中より血に染みし肉の見ゆるさへあるに頭部には一ケ所太き錐にて突きたるかと思はるゝ深さ二寸餘の穴あり其上槌の類にて强く毆打したりと見え頭は二ツに割け腦骨碎けて腦味噌散亂したる有樣實に目も當られぬ程なり醫師の診斷に由れば孰れも午前二三時頃に受けし傷なりと同人の着服は紺茶堅縞の單物にて職業も更に見込附かず且つ所持品等は一點もなし其筋の鑑定に據れば殺害したる者が露見を防がんが爲めに殊更奪ひ隱したる者ならん故に何所の者が何の爲めに斯く淺ましき死を遂げしや又殺害したる者は孰れの者か更に知る由なければ目下嚴重に探偵中なり（以上は某の新聞の記事を其儘に轉載したる者なり）

猶ほ此無慘なる人殺に附き其筋の調たる所を聞くに死骸は川中より上げたれど流れ來りし者には非ず別に溺れ漂ひたりと認むる箇條は無く殊に水の來らざる岸の根に捨てゝ有りたり、猶ほ周邊に血の痕の無きを見れば外にて殺せし者を舁ぎ來りて投込みし者なる可し又此所より一町ばかり離れし或家の塀に血の附きたる痕あれど之も殺したる所には非ず多分は血に塗れたる死骸を舁ぎ來る途中事故ありて暫し其塀に立掛し者なる可し

殺せしは何者か殺されしは何者か更に手掛り無しとは云へ七月の炎天、腐敗り易き盛りと云ひ殊に我國には佛國巴里府ルー、モルグに在る如き死骸陳列所の設けも無きゆゑ何時までも此

儘に捨置く可きに非ず、最寄區役所は取敢へず溺死漂着人と見做して仮に埋葬し新聞紙へ左の如く廣告したり

溺死人男年齢三十歳より四十歳の間當二十二年七月五日區内築地三丁目十五番地先川中へ漂着仮埋葬濟○人相○顔面長き方○口細き方眉黒き方目耳尋常左りの頰に黒痣一ツあり頭散髪身長五尺三寸位中肉○傷所數知れず其内大傷は眉間に一ケ所背に截割たる如き切傷二ケ所且肩より腰の邊りへ掛け總体に打のめされし如く膨上れり左の手に三ケ所、首に一ケ所頭の眞中に大傷其處此處に擦傷等數多あり、咽に攫み潰せし如き傷○衣類大名縞單物、二タ子唐桟羽織但紐附、紺博多帶、肉シヤツ、下帶、白足袋、駒下駄○持物更に無し○心當りの者は申出づ可し

明治二十二年七月六日

最寄區役所

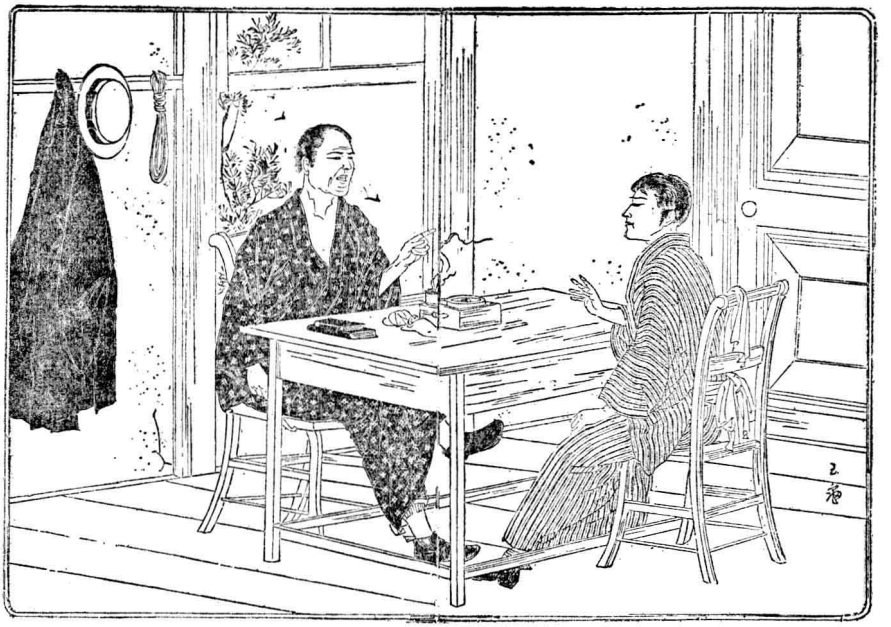
（右某新聞より轉載）

人殺しは折々あれど斯くも無慘な、斯くも不思議な、斯くも手掛なき人殺しは其類少し去れば其日一日は到る所ろ此人殺しの噂ならぬは無りしも都會は噂の種の製造所なり翌日は他の事の噂に口を奪はれ全く忘れたる如し獨り忘れぬは最寄警察の刑事巡査なり死骸の露見せし朝の猶ほ暗き頃より心を此事にのみ委ね身を此事にのみ使へり、心を委ね身を使へど更に手掛りの無きぞ悲しき

刑事巡査、下世話に謂ふ探偵、世に是ほど忌はしき職務は無く又之れほど立派なる職務は無し、忌はしき所を言へば我身の鬼々しき心を隠し友達顔を作りて人に交り、信切顔をして其人の秘密を聞き出し其れを直様官に賣附けて世を渡る、外面如菩薩内心如夜叉とは女に非ず探偵なり、切取强盗人殺牢破りなど云へる惡人多からずば其職繁昌せず、惡人を探す爲に善人を迄も疑ひ、見ぬ振をして偸み視、聞かぬ様をして偸み聽、人を見れば盗坊と思へてふ恐き誡めを職業の虎の卷とし果は疑ふに止らで、人を見れば盗坊で有れかし罪人で有れかしと祈るにも至るあり、此人若し謀反人ならば吾れ捕へて我手柄にせん者を、此男若し罪人ならば我れ密告して酒の代に有附ん者を、頭に蠟燭は戴かねど見る人毎を呪ふとは恐ろしくも忌はしき職業なり立派と云ふ所を云へば斯くまで人に憎まるゝ

を厭はず惡人を看破りて其種を盡し以て世の人の安きを計る所謂身を殺して仁を爲す者、是ほど立派なる者あらんや

五日の朝八時頃の事最寄警察署の刑事巡査詰所に二人の探偵打語らへり一人は年四十頃デップリと太りて顏には絶えず笑を含めり此笑見る人に由りて評を異にし愛嬌ある顏と褒めるも有り人を茶かした顏と貶るも有り公平の判斷は上向けば愛嬌顏、下へ向ては茶かし顏なる可し、名前は谷間田と人に呼ばる紺飛白の單物に博多の角帶、數寄屋の羽織は脫ぎて鴨居の帽子掛に釣しあり無論官吏とは見えねど商人とも受取難し、今一人は年廿五六小作りにして如才なき顏附なり白き棒縞の單物金巾のヨコ帶、何う見ても一個の書生なれど玆に詰居る所を見れば此頃谷間田の下役に拜命せし者なる可し此男テーブル越に谷間田の顏を見上げて「實に不思議だ、何う云ふ譯で誰に殺されたか少しも手掛りが無い」谷間田は例の茶かし顏にて「ナニ手掛は有るけれど君の目には入らぬのだ何しろ東京の内で何家にか一人足らぬ人が出來たのだから分らぬと云ふ筈は無い早い譬へが戶籍帳を借りて來て一人〳〵調べて廻れば何所にか一人不足して居るのが殺された男と先斯う云ふ樣な者サ大鞆君、君は是が初めての事件だから充分働いて見る可しだ、斯う云ふ六ケしい事件を引受けねば昇等は出來ないぜ(大鞆)夫りや分ツ居る盤根錯節を切んければ以て利器を知る無しだから六かしいは些とも厭ヤせんサ、けどが何か手掛りが無い事にや—先ア君の見た所で何の樣な事を手掛と仕給ふか(谷)何の樣な事と、何から何まで皆手掛りでは無いか第一顏の面長いのも一ツの手掛り左の頰に痣の有るのも亦手掛り背中の傷も矢張り手掛り先づ傷が有るからには鋭い刃物で切たには違ひ無い左すれば差當り刃物を所持して居る者に目を附けると先ア云ふ樣な具合で其目の附所は當人の才不才と云ふ者君は日頃から佛國の探偵が何うだの英國の理學は斯だのと洋書を獨りで讀んだ樣な理屈を並べるから是も得意の論理學とか云ふ者で割出して見るが好いアハ、何と爾では無いか」大鞆は心中に己れ見ろと云ふ如き笑を隱して故と頭を搔き「夫は爾だけどが書物で讀むのと實際とは少し違ふからナア小說などに在る曲者は足痕が殘ツて居るとか兇器を遺れて置くとか必ず三ツ四ツは手掛りを存して有るけどが是ばかりは爾で無い、天きり殺された奴の名前からして世間に知て居る人が無い夫だから君何所から手を附けると云ふ取附だけは知せて呉れねば僕だツて困るじや無いか(谷)其取附と云ふのが銘々の腹に有る事で君の能く云ふ機密とやらだ互ひに深く隱して、サアと成る迄は假令へ長官にも知さぬ程だけれど君は先づ私が周旋で此署へも入て遣た者では有し殊に是が軍で言へば初陣の事だから人に云はれぬ機密を分けて遣る其所の入口を閉て來たまへ(大)夫や實に難有い畢生の鴻恩だ」谷間田は卓子の上の團扇を取り徐々と煽ぎながら少し聲を低くして「君先づ此人殺しを何と思ふ慾德盡の追劍と思ふか但しは又—(大)左樣サ持物の一ツも無い所を見れば追劍かとも思はれるし死樣の無慘な所を見れば何かの遺恨だらうかとも思ふし兎に角佛國の探偵秘傳に分り難き犯罪の底には必ず女ありと云ツて有るから女に關係した事柄かとも思ふ(谷)サ、爾先ツ潛りをするから困る靜に聞たまへな、持物の無いのは誰が見ても曲者が手掛りを無くする爲に隱した事だから追劍の証據には成らぬが、第一傷に目を留たまへ傷は背に刀で切たかと思へば頭には槌で碎いた傷も有る既に腦天などは槌だけ丸く肉が凹込んで居る爾かと思へば又所々には抓投た樣な痕も有る(大)成るほど—(谷)未だ不思議なのは頭にへばり附て居る血を洗ひ落して見た所頭の凹込んで碎けた所に太い錐でも叩き込んだ樣な穴も有るぜ—君は氣が附くまいけれど(大)ナニ氣が附て居るよ二寸も深く突込んだ樣に(谷)夫なら君アレを何で附けた傷と思ふ(大)夫は未だ思考中だ(谷)ソレ分るまい分らぬならば默ツて聞く可しだ、私はアレを此頃流行るアノ太い鉄の頭挿を突込んだ者と鑑定するが何うだ」大鞆は思はずも笑はんとして辛と食留め「女がかへ(谷)頭挿だ



から何うせ女サ、女が自分で仕なくても曲者が、傍に落て居るとか何うとかする女の頭挿を取て突たのだ孰れにしても殺す傍には女びれが居たは之で分る（大）でも頭挿の脚は二ッだから穴が二ッ開く筈だらう（谷）馬鹿を言ひ給へ、二寸も突込うと云ふには非常の力を入れて握るから二ッの脚が一ッに成るのサ（大）一ッに成ても穴は横に扁たく開く筈だ、アノ穴は少しも扁たく無い満丸だよシテ見れば頭挿で無い外の者だ」谷間田は又茶かす如く笑ひて「爾氣が附くは仲々感心是だけは實の所ろ一寸と君の智恵を試して見たのだ」大鞆は心の底にて「ナニ生意氣な、人を試すなどと其手に乗る者か」と嘲り畢ッて「夫なら本統の所ろアレは何の傷だ（谷）夫は未だ僕にも少し見込が附かぬが先静かに聞く可し、兎に角斯う種々様々の傷の有る所を見れば、好かへ能く聞たまへ、一人で殺した者では無い大勢で寄て襲ッて殺した者だ（大）成る程―（谷）シテ見れば先づ曲者は幾人も有るのだが、併し寄て襲ッて殺すには何うしても往來では出來ぬ事だ（大）夫や何う云ふ譯で（谷）何う云ふ譯ッて君、聞たまへよ（大）又聞たまへか（谷）イヤ先聞たまへ、往來なら逃廻るから夫を追掛ける中には人殺し人殺しと必ず聲を立る其中には近所で目を醒すとか巡査が聞附るとかするに極つて居る（大）夫では野原か（谷）サア野原と云ふ考へも起る併し差當り野原と云へば日比野か海軍原だ、日比谷から死骸をアノ河岸まで擔いで來る筈は無し、又海軍原でも無い、と云ふ者は海軍原へは矢鱈に這入れもせず、又隅から隅まで探しても殺した様な跡は無し夫に一町ばかり離れた或家の塀に血の附て居る所を見ても海軍原で殺して築地三丁目の河岸へ捨るに一町も外へ舁で行く筈も無（大）夫では家の内で殺したのか（谷）先聞たまへと云ふのに、爾サ家の内とも、家の内で殺したのだ、（大）家の中でも矢張り騒しいから近所で目を醒すだらう（谷）ソオレ爾思ふだらう素徒は兎角爾云ふ所へ目を附けるから仕方が無い成るほど家の中でも大勢で人一人殺すには騒ぎ廻るに違ひ無い、從ッて又隣近所で目を醒すに違ひ無い、其所だテ隣近所で目を醒してもア、又例の喧嘩かと別に氣にも留ずに居る様な所が何所にか有るだらう（大）夫では屢々

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

大喧嘩の有る家かネ（谷）爾サ、屢々大勢の人も集り又屢々大喧嘩も有ると云ふ家が有る其様な家で殺されたから隣近所の人も目を醒したけれど平氣で居たのだ別に咎めもせずに捨て置て又眠ツて仕舞ツたのだ（大）併し其様な大勢集ツて喧嘩を再々する家が何所に在る（谷）是ほどいツても未だ分らぬから素徒は夫で困る先少し考へて見たまへな（大）考へても僕には分らんよ（谷）刑事巡査とも云はれる者が是位ゐの事が分らんでは仕方が無いよ、賭場だアネ（大）エ、ドバ、ドバなら知て居る佛英の間の海峡（谷）困るなア冗談ぢや無いぜ賭場とは賭博場だアネ（大）成るほど賭場は博奕場か夫なら博奕場の喧嘩だネ（谷）爾サ博奕場の喧嘩で殺されたのよ博奕場だから誰も財布の外は何も持て行ぬがサア喧嘩と云へば直に自分の前に在る金を懐中へ掻込んで立ち其上で相手に成るのが博奕など打つ奴の常だ其所には仲々抜目は無いワ、アノ死骸の當人も矢張り夫だぜ詳しい所までは分らぬけれど何でも傍に喧嘩が有たので手早く側中の有金を引浚ツて立うとすると居合せた者共が銘々に其一人に飛掛り初の喧嘩は扨置て己の金を何うしやがると云ふ様な具合に手ン手ンに奪ひ返す所から一人と大勢との入亂れと爲り踏れるやら打れるやら何時の間にか死で仕舞ツたンだ、夫だから持物や懐中物は一個も無いのだ、エ何うだ恐れ入たか」大鞆は暫し默考へて「成る程旨く考へたよ、けどが是は未だ歸納法で云ふ「ハイポセシス」だ仮定説だ事實とは云はれぬテ之から未だ「ヴェリフィケーション」（証據試驗）を仕て見ん事にゃ（谷）サ夫が生意氣だと云ふのだ自分で分らぬ癖に人の云ふ事に批を打たがる（大）けどが君、君が根據とするのは唯様々の傷が有と云ふだけの事で傷からして大勢と云ふ事を考へ大勢からして博奕場と云ふ事を考へた丈じゃ無いか詰り証據と云ふのは様々の傷だけだ外に何も無い、第一此開明世界に果して其様な博奕場が有る筈も無し―（谷）イヤ有るから云ふのだ築地へ行ツて見ろ支那人が七八も遣るし博奕宿もあるし宿ツてもナニ支那人が自分では遣らぬ皆日本の博徒に宿を借して自分は知らぬ顔で場錢を取るのだ場錢を、だから最うスッカリ日本の賽轉で狐だの長半などを遣て居るワ（大）けどが博奕打にしては衣服が變だよ博多の帶に羽織などは―（谷）ナアニ支那人の博奕宿へ入込む連中には黒い高帽を冠ッた人も有るし様々だ、夫に又アノ死骸を詳しく見るに手の皮足の皮などの柔な所は荒仕事をした事の有る人間でも無し、かと云て生眞面目の町人でも無い何うしても博奕など打つ様な惰け者だ」大鞆は眞實感心せしか或は浮立せて猶ほ其奥を聞んとの巧計なるか急に打開けし言葉の調子と爲り「イヤ何うも感心した、何にも手掛りの無いのを是まで見破ぶるとは、成る程築地には支那人が日本の法權の及ばぬを奇貨として其様な失敬な事を仕て居るかナア、實に卓眼には恐れ入た」谷間田は笑壺に入り「フム恐れ入たか、爾折て出れば未だ聞せて遣る事が有る實はナ」と云ひながら又も聲を低くし「現場に立會た豫審判事を初め刑部に至るまで丸ッきり手掛が無い様に思つて居るけれど未だ目が利ぬと云ふ者だ己は一ッ非常な証據者を見出して人知ず取て置た（大）エ、何か証據品が落て居たのか夫は實に驚いたナ（谷）ナニ斯う抜目なく立廻らねば駄目だよ夫も君達の目で見ては何の証據にも成らぬが苦勞人の活た目で見れば夫が非常な証據に成る（大）エ其品は何だ、見せたまへ、エ君賽轉の類でも有るか（谷）馬鹿を云ふな賽轉などなら誰が見ても証據品と思ふワな己の目附たのは未だズット小さい者だ細い者だ」大鞆は益々詰寄り「エ何だ何れ程細い者だ（谷）聞せるのじゃ無いけれど君だから打明けるが實は髪の毛だ、夫も唯一本アノ握ッた手に附て居たから誰も知らぬ先に己がコッソリ取ッて置た」大鞆は心の中にて私に笑を催ほし、「ナニ其髪の毛なら手前より己様の方が先に見附たのだ實は四本握つて居たのをソッと三本だけ取て置た、夫を知らずに殘りの一本を取て好い氣に成て居やがる老耄め、併し己の方は若しも証據隱匿の罪に落ては成らぬと一本殘して置たのに彼奴其一本を取れば後に殘りが無

いから取も直さず犯罪の証據を隱したに當る夫を知ないでヘンなにを自慢仕やがるんだ」と笑ふ心を推隱して「へヽエ、君の目の附所は實に違ふナル程僕も髮の毛を一本握ッて居るのをば見たけれど夫が証據に成うとは思はず、實に後悔だ君より先へ取て置ば好ったのに（谷）ナアニ君などが取たって仕方が無いワネ、若し君ならば一本の髮の毛を何うして証據にする天きり証據にする術さへ知らぬ癖に（大）知なくても先へ取れば後で君に問ふのサ何うすれば証據に成るだらうと、エー君、何うか聞せて呉れたまへ極内で、エ一本の髮の毛が何うして証據に成る」下から煽げば浮々と谷間田は誇り裂けるほどに顏を擴げて「先ア見たまへ此髮の毛を」と云ひながら首に掛たる黑皮の懷中暮口より長さ一尺强も有る唯一本の髮の毛を取出し窓の硝子に透し見て「コレ是だ、先づ考へ可し、此通り幾曲りも搖て居るのは縮れッ毛だぜ、長さが一尺ばかりだから男でもチョン髷に結て居る髮の毛は是だけの長は有るが今時の事だから男は縮毛なら剪て仕舞ふ剪ないのは幾等か髮の毛自慢の心が有る奴だ男で縮れっ毛のチョン髷と云ふのは無い（大）爾々縮れッ毛は殊に散髮に持て來いだから縮れッ毛なら必ず剪て仕舞ふ本統に君の目は凄いネ（谷）爾すれば是は女の毛だ、此人殺の傍には縮れッ毛の女が居たのだ（大）成る程（谷）居たドコロでは無い女も幾分か手を下したのだ（大）成るー（谷）手を下さ無ければ髮の毛を握まれる筈が無い是は必ず男が死物狂に成り手に當る頭を夢中で握んだ者だ夫で實は先ほどもアノ錐の樣な傷を若しや頭挿で突たのでは無いかと思ひ一寸と君の心を試して見たのだ素徒の目でさへ無論簪の傷で無いと分る位だから其考へは廢したが兎に角、縮れッ毛の女が傍に居て其髮を握まれた事は君にも分るだらう（大）ア、分るよ（谷）其所で又己が思ひ出す事が有る、最うズッと以前だが博賭徒を探偵する事が有て己が自分で博賭徒に見せ掛け二月ほど築地の博徒宿に入込んだ事が有る其頃丁度築地カイワイに支那人の張て居る宿が二ケ所あつた、其一ケ所に恐しいアバズレの、爾サ宿場女郎のあがりでも有うよ、でも顏は一寸と好い二十四五でも有うか或は三十位でも有うかと云ふ女が居た、今思へば夫が恰度此通りの縮れッ毛だ（大）夫は奇妙だナ（谷）サア博賭宿と云ひ縮れッ毛の女と云ひ此二ッ揃ッた所は外に無い、爾思ふと心の所爲かアノ死顏も何だか其頃見た事の有る樣な氣がするテ、だからして何は兎も有れ己は先づ其女を捕へようと思ふのだ、名前は何とか云たッけ、之も手帳を見れば分る函々お紺と云ッた、お紺〳〵餘り類の無い名前だから思ひ出した、お紺〳〵、尤も今未だ其女が居るか居無いか夫も分らぬけれど、旨く居て呉れさへすれば此方の者だ、女の事だから連て來て少し威し附ればベラ〳〵と皆白狀する、何うだ剛い者だらう（大）實に恐入ったナア、けどが其宿は何所に在るのだ築地の何所いらに、夫さへ教へて呉れゝば僕が行て蹈縛て來る、エ何所だ直に僕を遣て呉たまへ」谷間田は俄に又茶かし顏に復り「馬鹿を言へ是まで煎じ詰めた手柄を君に取られて堪る者か（大）でも君は、僕の爲に教へて遣ると云ッたでは無いか、夫で僕を遣て呉れ無いならば教へて呉れたでは無い唯だ自慢を僕に聞せた丈の事だ（谷）夫れほど己の手柄を奪ひ度きや遣てやらうよ（大）ナニ手柄を奪ふなどと其樣な野心は無い僕は唯だー（谷）イヤサ遣ても遣うが第一君は何うして行く（大）何うしてッて外に仕方は無いのサ君に其町名番地を聞けば後は出た上で巡査にでも郵便配達にでも聞くから譯は無い、其家へ行て此家にお紺と云ふ者は居無いかと問ふのサ」谷間田は聲を放ッて打笑ひ「夫だから仕方が無い、夜前人殺と云ふ大罪を犯したもの、多分は何所かへ逃たゞらう、好や居るにしても居るとは言ぬよ、事に由れば餘溫の冷るまで當分博賭も止るかも知れぬ何うして其樣な未熟な事で了る者か、差當り其家へは行かずに外の所で探偵するのが探偵のいろはだよ、外の所で愈々突留めた上は、此方の者だ、先が逃ようとも隱れようとも其ンな事は平氣だ、隱れたら公然と御用で以て蹈込む事も出來る、支那人

なら一旦隱れた日にや日本の刑事巡査が何とも
する事は出來ぬけれどお紺は日本の女だから
（大）併し君、外で聞とは何所で聞くのだ（谷）
夫を知らない樣で此事件の探偵が出來る者か夫
は最う君の常に謂ふ臨機應變だから己の樣に何
所を推せば何な音が出ると云ふ事をチヤーンと
知た者で無くては了ない是ばかりは敎へ度にも
敎へ樣が無いから誠に困るテ」斯く云ふ折しも
先ほど閉置きたる入口の戸を開き「谷間田、何
うした略ぼ見當が附たかへ」とて入來るは此事
件を監督する荻澤警部なり谷間田は惡事でも見
附られしが如く忽ち椅子より飛退きて「ヘイヘ
イ凡そ見當は附きました是から直に探りを初め
ましてナニ二三日の中には必ず下手人を捕へま
す」と長官を見上たる谷間田の笑顏、成るほど
此時は愛嬌顏なりき―上向けば每でも、
谷間田は直帽子を取り羽織を着てさも〳〵拙者
は時間を無駄には捨ぬと云ふ見榮で、長官より
先に出去たり、後に長官荻澤は彼の取殘されし
大鞆に向ひ「何うだ貴公も何か見込を附けた
か、今朝死骸を檢めて頭の血を洗つたり手の握
具合に目を留めたりする注意は仲々素徒とは見
えんだツたが」大鞆は頭に手を置き「イヤ何う
も實地に當ると、思ツた樣に行きませんワ、何
うしても谷間田は經驗が詰んで居るだけ違いま
す今其意見の大略を聞てほと〳〵感心しました
（荻）夫やなア何うしても永年此道で苦勞して
居るから一寸と感心させる樣な事を言うテけれ
ども夫に感心しては了ん、他人の云ふ事に感心
してはツイ雷同と云ふ事に成て自分の意見を能
う立ん、間違ても好から自分は自分だけの見込
を附け見込通り探偵するサ外の事と違ひ探偵ほ
ど間違ひの多い者は無いから何うかすると老練
な谷間田の樣な者の見込に存外間違ひが有て貴
公の樣な初心の意見が當る事も有る貴公は貴公
だけに遣て見たまへ（大）ヘイ私しも是から遣
て見ます（荻）遣るべし〳〵」と勵す如き言葉
を殘して荻澤は立去れり、大鞆は獨り手を組で
「旨い長官は長官だけに、一寸と勵まして呉れ
たぞ、けどが貴公の樣な初心とは少し癪に障る
ナ、初心でも谷間田の樣な無學には未だ負けん
ぞ、ナニ感心する者か、併し長官さへ彼れ程に
賞る位だから谷間田は上手は上手だ自惚るも無
理は無い、けどが己は己だけの見込が有るワ、
見込が有るに依て實は彼奴の意見の底を探りた
いと下から出て煽起れば圖に乘てペラ〳〵と多
舌りやがる、ヘン人、彼奴が經驗〳〵と經驗で
以て探偵すれば此方は理學的と論理的で探偵す
るワ、探偵が道樂で退校された己樣だ無學の老
耄に負て堪る者か、彼奴め頭の傷を說明する事
が出來んで頭挿で突たなどと苦がりやがるぞ此
方は一目見た時からチヤアンと見拔てある所持
品の無い譯も分つて居るは、彼奴が博奕場と目
を附たのも旨い事は旨いけどがナニ、博奕場の
喧嘩に女が居る者か、成る程ソリヤ數年前に縮
れッ毛の女が居たかも知れぬ、けどが女が人殺
の直接のエジェンシー（働き人）と云ふ事は無
い、と云つて己も是だけは少し明解し兼るけれ
どナニ失望するには及ばぬ、先づ彼奴の歸るま
で宿へ歸つてアノ髮の毛を理學的に試驗する
だ、夕方に成つて又茲へ來りや彼奴必ず歸つて
居るから其所で又少し煽起て遣れば、爾だ僕は
汗水に成て築地を聞合せたけどが博奕宿の有る
所さへ分らなんだと斯う云へば彼奴必ず又圖に
乘て、手柄顏に自分の探偵した事も悉皆り多舌
て仕無うテ無學な奴は煽起が利くから有難いナ
ア、好い年を仕て居る癖に」
獨言つゝ大鞆は此署を立去りしが定めし宿所に
や歸けん扨も此日の將に暮んとする頃彼の谷間
田は手拭にて太き首の汗を拭きながら歸り來り
直に以前の詰所に入り「オヤ大鞆は、フム彼奴
何か思ひ附て何所かへ行たと見えるな」云ひつ
つ先づ手帳紙入など握み出して卓子に置き其上
へ羽織を脫ぎ其又上へ帽子を伏せ兩肌脫ぎて
突々と薪水室に歩み入りつ手桶の水を手拭に受
け絞り切つて胸の當りを拭きながら斜に小使を
見て例の茶かし顏「お前アノ大鞆が何時出て
行たか知ないか（小）何でもお前樣が出爲てか
ら半時も經たんべい、獨りブツクリ〳〵言なが
ら出て行つたアだ（谷）フーム何所へ行たか、
目當も無い癖に（小）何だかお前樣の事を言ツ

たアだぜ、私が廊下を掃て居ると控所の内で谷間田は好年イして煽起エ利くッて、彼奴浮々と悉皆り多舌て仕舞たと言きやがッて、エお前様煽起が利きますか谷間田は眼を圓くし「エ彼奴が己の事を煽起が利くッて失敬な奴だ好々是から見ろ何も教へて遣ぬから好いワ、生意氣な」と打呟きつゝ早々拭終り又も詰所に歸りて帽子は鴨居に掛け羽織は着、手帳紙入は懐中に入れ又「フ失敬な―フ小癪な―フ生意氣な」と續け乍ら長官荻澤警部の控所に行たり長官に向ひ谷間田は（無論愛嬌顔で）先ほど大鞠に語りし如く傷の様々なる所より博奕場の事を告げ頓て縮れたる髪筋を出して差當りお紺と云へる素性不明の者こそ手掛りなれと說き終りて更に又手帳を出し「斯う見込を附たから打附けに先づ築地の吉の所へ行きました、吉に探らせて見るとお紺は昨年の春あたり築地を越して何所へか行き今でも何うかすると築地へ來ると云ふ噂サも有るが多分淺草邊だらうとも云ひ又牛込だとも云ふのです實に雲を握む様な話しさ、でも先差當り牛込と淺草とを目差して先づ牛込へ行き夫々探りを入て置て直又車で淺草へ引返しました、何うも汗水垢に成て働きましたぜ、車代ばかり一圓五十錢から使ひました夫是の費用がザッと三圓サ、でも先アヤツとの事に淺草で見當が附ました（警部は腹の中でフム牛込だけはお負だナ、手當を餘計せしめようと思ッて）實は斯うなんですお紺の年頃から人相を私の覺えて居るだけの事を云て自分でも聞き又兼て賴み附の者にも搜らせた所、何だか馬道の氷屋に髪の毛の縮れた雇女が居たと云ふ者が有るんです今度は直自分で馳附ました、馳附て馬道の氷屋を片ッぱしから尋ねました所が居無い又歸つて能く聞くと―（荻）爾長たらしくては困るズッと端折て〳〵、全體お紺が居たか居ぬか夫を先に云はんけりや（谷）居ました居ましたけれど昨夜三十四五の男が呼に來て夫に連られ直歸るとて出たッ切り今以て歸らず今朝から探して居るけれど行衛も知れぬと申ます、エ怪いじや有ませんか的切り爾ですぜ三十四五の男と云ふのがアノ死骸ですぜ、夫も詳しくは覺えぬと云ひますけれど何だか顏が面長くて別に是と云ふ癖も無く一寸と見覺えの出來にくい恰好だッたと申ます、左の頰に黑痣はと聞きまし

たら夫は確かに覺えぬが何でも大名縞の單物の上へ羽織を着て居たと云ふ事です、コレは最う氷屋の主人も雇人も云ふ事ですから確かです（荻）併し淺草の者が築地まで―（谷）夫も譯が有ますよお紺は氷屋などの渡り者です是までも折々築地に母とかの有る樣な話をした事も有り、又店の急しい最中に店を空た事も有ます相で（荻）夫では最う何うしてもお紺を召捕らねば（谷）爾ですとも爾だから歸つたのです何でも未だ此府下に隱れて居ると思ひますから貴方に願つて各警察へ夫々人相なども廻し其外の手配も仕て戴き度いので、私しは是より直に又其淺草の氷屋で何う云ふ通傳を以てお紺を雇入たか、誰が受人だか夫を探し又愈々築地に居る母とか何とか云ふ者が有るなら夫も探し又、先の博奕宿が未だ有るか無いか若し有るなら昨夜何の樣な者が集ツたか、其所へお紺が來たか來ないか、と夫から夫へ段々と探し詰ればナニお紺が何所に隱れて居ようと直に突留めますお紺さへ手に入れば殺した者は誰、殺された者は誰、其譯は是々と直に分ツて仕舞ひます」何の手掛も無き事を僅か一日に足らぬ間に早や斯くまでも調べ上しは流石老功の探偵と云ふ可し、荻澤への說明終りて又も警察署を出て行く、其門前にて「イヨ谷間田君、手掛りが有たら聞せて呉れ」と呼留たるは彼の大鞆なり大鞆は先刻宿に歸りてより所謂理學的論理的に如何なる事を調しや知らねど今又谷間田に煽起を利せて彼れが探り得たる所を探り得んと玆に來りし者なる可し去れど谷間田は小使ひより聞得し事ありて再び大鞆に胸中の秘密を語らじと思へる者なれば一寸と大鞆の顏を見向き「今に見ろ」と云ひし儘、後は口の中にて「フ失敬な―フ小癪な―フ生意氣な」と呟きながら彼の石の橋をも蹈拔く決心かと思はるゝばかりに足蹈鳴して渡り去れり大鞆は其後姿を眺めて「ハテナ、彼奴何を立腹したか今に見ろと言ふアノ口振ではお紺とやらの居所でも突留たかなナニ構ふ者かお紺が罪人で無い事は分ツて居る彼奴夫と知らずに、フ今に後悔する事も知らずに―夫にしても理學論理學の力は剛い者だ、タツた三本の髮の毛を宿所の二階で試驗して是だけの手掛りが出來たから實に考へれば我ながら恐しいナア、恐らく此廣い世界で略ぼ實の罪人を知たのは己一人だらう、是まで分ツたから後は明日の晝迄には分る、面白い〳〵、悉皆罪人の姓名と番地が分るまでは先づ荻澤警部にも默ツて居て、少しも私しには見當が附ませんと云ふ樣な顏をして散々谷間田に誇らせて置て爾だ明日の正午十二時にはサア罪人は何町何番地の何の誰ですと明了に言切ツて遣る愉快〳〵併し待よ唯一通りの犯罪と思ツては少し違ふ、罪人が何うも意外な所に在るから愈々其名前を打明る日にや社會を騷がせるテ、輿論を動かすテ、條約改正の樣に諸方で之が爲に、演說を開く樣になれば差當り己が辯士先づ大井憲太郎君と云ふ顏だナ―故郷へ錦、愉快〳〵」大鞆は獨り頻笑み警察署へは入らずして其儘又も我宿へブラ〳〵と歸り去れりア、大鞆は如何なる試驗を爲し如何なる事を發明せしや僅か三本の髮の毛、如何なる理學的ぞ如何なる論理的ぞ谷間田の疑へるお紺は果して全くの無關係なるや、疑團又疑團、明日の午後には此疑團如何に氷解するや

中篇（忖度）

翌六日の正午、大鞆は三筋の髮の毛を恭しく紙に包み水引を掛けぬばかりにして警察署に出頭し先づ荻澤警部の控所に入れり、折柄警部は次の室に食事中なりしかば其終りて出來るを待ち突如に「長官大變です」荻澤は半拭にて髭の汚れを拭取りながら椅子に憑り「唯だ大變とばかりでは分らぬが手掛でも有たのか（大）エ手掛、手掛は最初の事です最う悉皆分りました實の罪人が―何町何番地の何の誰と云ふ事まで」荻澤は怪しみて「何うして分つた（大）理學的論理的で分りました而も非常な罪人です實に大事件です」荻澤は殆ど大鞆が俄に發狂せしかと迄に怪しみながら「非常な罪人とは誰だ、名前が分つて居るなら先づ其名前を聞う（大）素より名前を言ますが夫より前に私しの發見した手續

きを申ます、けどが長官、私しが說明して仕舞ふ迄は此室へ誰れも入れぬ事に仕て下さい小使其他は申すに及ばず假令ひ谷間田が歸つて來るとも決して無斷では入れぬ事に（荻）好々谷間田はお紺の隱伏て居る所が分つたゆゑ午後二時までには拘引して來るとて今方出て行たから安心して話すが好い」荻澤は固より心から大鞆の言葉を信ずるに非ず今は恰も外に用も無し且は全く初陣なる大鞆の技量を試さんとも思ふにより旁々其言ふ儘に從へるなり（大）では長官少し暑いけどが茲等を締ますよ昨日も油斷して獨言を吐て居た所ろ後で見れば小使が廊下を掃除しながら聞て居ました、壁に耳の譬へだから聲の洩れぬ樣にして置ねば安心が出來ません」と云ひつゝ四邊の硝子戸を鎖して荻澤の前に居直り、紙包みより彼の三筋の髮毛を取出しつ細語く程の低き聲にて「長官此髮を御覽なさい是はアノ死人が右の手に握つて居たのですよ（荻）オヤ貴公も夫を持て居るか谷間田も昨日一本の髮を持て居たが（大）イエ了ません谷間田より私しが先へ見附たのです、實は四本握つて居たのを私しが先へ廻つて三本だけソツと拔て置きましたハイ谷間田は夫に氣が附きません初めから唯一本しか無い者と思つて居ます」荻澤は心の中にて（個奴馬鹿の樣でも仲々拔目が無いワヘ）と少し驚きながら「夫から何うした（大）谷間田は之を縮れ毛と思つてお紺に目を附ました、夫が間違ひです若し谷間田の疑ひが當れば夫は偶中りです論理に叶つた中方では在ません、私しは一生懸命に成て種々の書籍を取出しヤツと髮の毛の性質だけ調べ上げました（荻）無駄事は成る可く省いて簡單に述るが好いぜ（大）ハイ無駄事は申しません先づ肝腎な縮れ毛の譯から云ひませう髮の毛の縮れるには夫だけの原因が無くては成ぬ、何が原因か全体髮の毛は先づ大方圓いとした者で、夫が根から梢まで一樣に圓いなら決して縮れません何うかすると中程に摘み挫いだ樣に薄ツぴらたい所が有る其扁たい所が縮れるのです、ですから生れ附の縮毛には必ず何所かに扁い所が有る、若し夫が無ければ本統の縮毛では無い、所で私しが此毛を疏末な顯微鏡に掛けて熟つく視ました所根から梢まで滿遍なく圓い、薄ツぴらたい所は一ツも無い、左すれば是は本統の縮毛で有ません、分りましたか、夫だのに丁度縮毛の樣に搖れ〳〵して居るのは何う云ふ譯だ、是は結んで居るうち附た癖です譬へば眞直な髮の毛でもチヨン髷に結べは其髷の所だけは解た後でも搖れて居ませう、夫と同じ事で此髮も縮れ毛では無い結んで居た爲に斯樣に癖が附たのです、ですからお紺の毛では有ません、分りましたか」荻澤は少し道理なる議論と思ひ「成る程分つた天然の縮毛で無いからお紺の毛では無いと云ふのだナ（大）サア夫が分れば追々云ひませう、僅三本の髮の毛ですけれど斯う云ふ具合に段々と詮議して行くと色々の証據が上つて來ます貴方先ア御自身の髮の毛を一本お拔なさい奇妙な証據を見せますから、此証據ばかりは自分に試驗して見ねば誰も誠と思ひません先ア欺されたと思つて一本お拔なさい、拔て私しの云ふ通りにすれば期と實の罪人が分ります」荻澤警部は馬鹿〳〵しく思へど物は試驗と自ら我頭より長サ三四寸の髮の毛を一本拔き取り「是を何うするのだ（大）其髮の根を右向け梢を左り向けて人差指と親指の二ツで中程をお摘みなさい（荻）斯うか（大）爾です〳〵、次に又最一本同じ位の毛をお拔なさい、イエナニ何本も拔には及びません唯二本で試驗の出來る事ですから僅に最一本です、爾々、今度は其毛を前の毛とは反對に根を左り向け末を右向て、今の毛と重ね、爾々其通り後前互違に二本の毛を重ね一緒に二本の指で摘で、イヤ違ます人差指を下にして其親指を上にして爾う摘むのです、夫で其人差指を前へ突出たり後へ引たり爾々詰り二本一緒の毛へ捻を掛たり戻したりするのですソレ奇妙でせう二本の毛が次第〳〵に右と左へズリ拔るでせう丁度二尾の鰻を打違へに握つた樣に一ツは右へ拔け一ツは左りへ拔て段々とソレ捻れば捻るほど、ネエ、奇妙でせう（荻）成る程奇妙だチヤンと重さねて摘んだのが次第〳〵に此通り最う兩方とも一寸ほどズリ拔た（大）夫は皆根の方

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com